

岩井勝次郎翁の菩提塔について

會員 渡 辺 勝

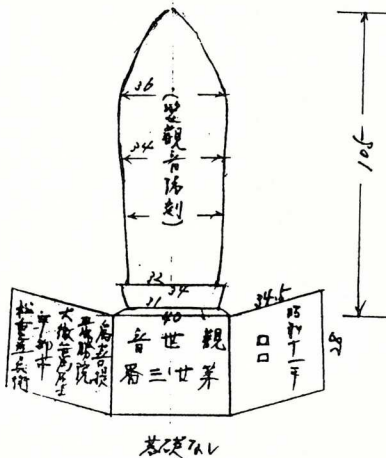
はじめに

遠石八幡宮参道を国道から入り、二ノ鳥居手前から右にとると小さい石橋がある。更に石段を登ると俗にいう千日寺があり、寺の前に様々な彫しい石仏が並んでいる。この石仏群を精査し気付いたことは図に示すように「為菩提最勝院大徹無為居士 昭和十一年十月」と陰刻した石仏が三基揃っていたことである。寄進者は「徳山市 河村秀吉」「宇部市 津脇勘市」「宇部市 松重善兵衛」と読みとれる。河村秀吉氏といえば徳山では人も知る屈指の事業家で地域に広く貢献された方である。このような方が菩提を弔う最勝院とはどんな立派な人であろうかと興味をもったのである。

一、最勝院とは

既刊の文献類を探したがこの戒名は発見できなかったので、徳山の寺院を一々お尋ねした。そしてこの戒名は常人

ではつけない人であること、禅宗の戒名であることを聞き福田寺、ついで興元寺に調査をお願いした。ところが数日して興元寺より過去帳にこの戒名と昭和一〇年一月二二日死去 岩井勝次郎と記載されていると通知があった。



も又多い（後述頌徳碑裏面）。こうして昭和一〇年一二月二日永眠 享年（満）七十二才。

このように徳山市の発展に多大の貢献をした翁の功績を称える為徳山市は「岩井勝次郎翁頌徳碑を、昭和一二年一月二二日建立した。場所は徳山市遠石小学校の東側薬師堂上の高地である。しかし昭和一七年六月徳山市動物園前の現地へ移転した。

三、菩提塔の寄進者

前述のように寄進者の一人河村秀吉氏は徳山の有力者であるが、寄進者の三人と岩井氏とはどう関係づけられるのであろうか。

河村秀吉氏は幼名亀市明治一六年一月生れ。若くして回漕業を開業した。以来徳山自動車組合を興し徳山商業学校（現県立徳山商業高等学校）設立発起者・徳山無尽（後の山口相互銀行、現西京銀行）設立・徳山海



向って左 河村秀吉氏寄進
（基壇の字は着色して撮影）
中央 津脇勘市氏寄進
向って右 六角供養塔

運（徳山機帆船・商工会議所副会頭その他多くの事業を手がけ、神社・港湾・市政（町会議員・市会議員歴任）関係にも大いに貢献している。徳山曹達との関係は戦前から殆んど専属のように会社の原料・製品の運輸・積荷荷役等船舶業務を請負っていた。又私的には俳句（号渾月）を

よくする等文化社会信仰面にいたる迄広く地域に貢献し昭和四三年三月二七日永眠。享年八五才。無量寺に眠る。観法院殿秀譽漣月徳翁大居士。

津脇勤市氏は古くから宇部市の石炭問屋であったが、戦中から戦後にかけては中国配炭公団（石炭統制団体）のトップとして活躍されたという。そして昭和五三年七九才で亡くなっている。氏は次の挿話が残っている。ある時徳山曹達では暴風のため石炭の船輸送が途絶えた。この時津脇氏は暴風の中をついて自ら機帆船にのりこみ輸送にあたり石炭在庫切れの危機を救ったと大いに賞讃されたという。

松重善兵衛氏は宇部市の米・石炭回漕問屋で、大分県津久見・愛媛県高浜の石灰石を徳山曹達・東洋曹達（現東ソ）へ機帆船輸送を行った。徳山には築港（現熊野神社の沖の埋立地）へ津脇商会（津脇勤市氏）と軒を並べ、元山運輸商事（徳山営業所をおき業務にあたったが、この石灰石輸送は津脇氏の紹介によつたらしい。善兵衛氏は初めて機帆船にデリッククレンを装備し荷役効率化を図つたり、曳帆船輸送（鉄箱船を二、三隻タグボートで曳く。萬歳丸700吨約二〇隻所有）を採用したり意欲的な人であった。昭和三二年死去。享年六四才。以上のように三氏は船輸送・荷役と直接深くつながりがあったのである。

四 菩提塔寄進の動機と時期

この菩提塔は千日寺三三観音の内として寄進されたものである（この外千日寺石仏群には新四国八八カ所が二系列その他が併祀されている）。これらの石仏は千日寺東側の小山（現在は住宅造成地）に千日寺横から山頂にかけて葛折りに配列されていたものを後に現在地へ移転したものである。

抑のこの三三観音勧請の発起理由について調査したが、既に古老も少く生存者からも言明が得られない。とすると当時の世相信仰心に頼らざるを得ない。勧請された昭和一年といえは太平洋戦争の原因となった日華事変勃発の前年で、二・二六事件の年である。満州事変が昭和六年に發生翌七年には上海事変、八年華北出兵と戦争は拡大の一途を辿っている。一方徳山市民にとって身近なことは昭和一〇年一〇月市政施行されたことである。そして翌一一年一〇月初めて工場祭（後の産業祭）が盛大に催されている。従つて市制施行の祝賀に因むことと、おそらく戦争拡大の不安はその儘兵士の無事を祈願する気持が込められて寄進の氣運となつたに違いない。このような武運長久を石仏に託す例はよくあり近辺では富田八八ヶ所には幕末戦の武運長久を刻字してある。こうして勧請が発起されたのであ

ろう。この時の寄進希望者は多くて三三観音のみならず千日寺新系列の四国八八カ所も建立されている。発起者には遂に对面できなかったが、河村氏（千日寺の本寺無量寺の檀家）の信仰面の実績からして有力な支持者であったであろう。

尚三氏は徳山曹達創業初期の苦難の嵐の中を開拓克服してきた岩井氏の事業への情熱と姿勢に同じ事業家として敬服共鳴し献身的協力と厚い交誼に結ばれていたことであろう。それは前述の挿話によっても窮い知れることである。こうした時恰も昭和一〇年一月二一日岩井勝次郎氏死去に接し、三氏は共々相語らい菩提を弔うこととなったものと推察される。

五 三三観音建立の場所

何故千日寺の山に配列されたのであろうか。これについても明言を得ていない。この地は拙著「徳山新四国八十八カ所」「近隣の霊場」（近日常）に述べる通り、徳山新四国八十八カ所の故地である。そして明治一〇年頃再び千日寺八八カ所が勧請されている。元々無量寺の地所であったから無量寺の了解が成立すれば勧請は容易であり、河村秀吉氏も大いに尽力したことであろう。山に登れば眼下に鼓海徳山灣を眺み古くから行楽景勝の地として親しまれた地

であり、岩井氏にとっても岩井商店の社運を賭けた徳山曹達を右に、又徳山鉄板を沖あいに見守るべくはた又菩提の地として相応しく恰好の地である。

六 石塔の形

三個の石塔は図のように、仏身は千手観音・聖観音・持経観音が陽刻されている。又基壇には各々寄進者等が陰刻された堂々石塔である。

しかしこの仏身と基壇の組合わせには疑問がある。三体内の二体の仏身は形（鋭尖頭光背型）・石質が類似しているが、一体（津脇氏石塔）は仏身の光背尖端が丸味をもち石質も異っている。更に他にはない「福寿海無量 千日白雲禪定尼 昭和十一年七月」と陰刻がある。この禪定尼は千日寺の尼僧と考えられるし、「福寿海無量」の文は百カ日忌板塔婆に書かれる文の一部に（真言宗）、又臨済宗観音経会の塔婆文句にも使われている。このことと津脇氏との関係をどう説明できるか。更に刻年月が異なる。基壇に観世音〇〇番と同じようにあることから同じ形式大きさをとったのではないか等々疑問が実に多い。

千日石仏群は前述のように昭和三〇年代後半期に山上からおろされ山積されていたものを、昭和五六年現状のように整理している。その時の作業状況から組合わせの復元は

むつかしく取違えられたとせざるをえない。

七 岩井勝次郎氏と禪

菩提塔と直接関係はないが、氏の私生活と徳山との関係について書き加えておきたい。氏の大正後半から昭和初期の苦境の中を事業に傾けた情熱を支えたものは何であったか。それは禪の道であった。自身の短気を後年には辛抱強い性格になったのは一に不断の修養と自己練磨の努力の結果であった。一説には一日少くとも三時間は坐禪を取組み精進したといわれる。そして神戸に伝芳庵を創設し梅谷香洲和尚を迎えた。さらに昭和一〇年には京都に長岡禅塾を建設し初代塾長に梅谷和尚を迎えている。こうした影響であらう徳山興元寺で徳山曹達社員の坐禅会等の行事が屢々催され盛んであったという。

氏は昭和一〇年一月二日神戸市御影町の自邸でなくなり二四日岩井系各社合同葬が行われた。ところが興元寺の過去帳にも記載されている。ということは徳山でもこれに準ずる追悼会のようなものが催されたということである。「徳山市史下」(S 35/10刊)の日本曹達工業㈱の欄に、岩井雄二郎社長の回想として「兄(英一郎)がなくなつた時その遺言で父の親しい禅宗の坊さんが遺骨をもって会社の敷地を廻つたが…」と載っている。この坊さんとは梅谷老師

であろう。日本曹達は岩井の社運をかけたといわれ、勝次郎氏長男英一郎氏は月二、三数回来徳し創業期の苦勞をつぶさに味わつたという。だから遺言も頷かれるのである。

さて徳山での勝次郎氏の追悼会の日は明らかではないが興元寺の記録から一月二四日から翌年一月二九日迄の間に興元寺先代金子本明和尚によって行われたと考えられる。

おわりに

筆者は本会誌第一〇号および本号に報告したように徳山新四国八八カ所を調査した時千日寺石仏群にもふれることとなつた。本報告はこの得体のしれない石仏群に異常な関心を抱き精査した結果(後日詳報予定)の一部報告である。市街化と共に吹きよせられたとも考えられる石仏群にも当時の人間模様をおとしている。温古知新、有為転変を改めて感じられるのである。

最後に調査にあたり興元寺、無量寺、藤井貫六・岩井靖御母堂・松重善三・河本政雄・渡辺義一・寸賀克己の各氏はじめ多くの方のご協力に深く謝辞を申し上げるものである。

合掌